令和５年度　兵庫県立和田山特別支援学校　学校評価〔自己評価〕

重点課題
1　児童生徒の主体的､対話的で深い学びを促す指導の工夫　　2　連続性のある多様な学びの場における教育の充実　　3　将来の自己実現につながるキャリア教育の充実　4　寄宿舎教育における体制や指導の充実 5　超過勤務時間の更なる減少を実現　6　研修等による専門性の確保と継承　7　チームで取り組む一貫した相談・支援体制の推進

評価	**4**：目標は十分達成されている	**3**：目標は概ね達成されている
	2：目標はあまり達成されていない	**1**：目標はまったく達成されていない
判定	**A**：良好（評価平均3.5以上）	**B**：概ね良好だが一層の取組が必要（評価平均3.0以上）
	C：取組に相当の工夫が必要（評価平均2.0以上）	**D**：取組の見直しが必要（評価平均2.0未満）

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価平均	判定	課題と改善点（来年度に向けて）
小学部	「できた」「うれしい」「心地よい」と感じる経験を重ねながら、好きなことや得意なことを知り、意欲的に学んだり、新しいことに挑戦したりする態度を養う。	1・3・7	・支援計画や指導計画を基に学習目標や育みたい力の共通理解を図り、児童が主体的に活動できる授業を展開する。 ・日々の児童との関わりを通して得られた情報や、アセスメントの結果等について教師全員で情報を共有し、児童の実態を整理した上で、それぞれの発達段階や生活年齢で求められる力を考慮しながら個別の指導計画を作成する。	・1年間、各授業の流れを同じにしたり、授業で使う道具の準備・片付け、椅子運びを児童自身で行ったりすることで、活動に見通しが持てたり、やることが分かって自分から動けたりするようになった。特に体力づくりでは、学部の教師全員で授業研究に取り組み、児童が「できた」「うれしい」という経験をたくさん重ねることができた。 ・放課後はクラス内で子ども達の様子の共有に務めた。多角的に子どもを捉えることができ、個々の指導計画に反映することができた。他クラスの児童の実態の理解については不十分なところがあった。	3.3	B	・来年度も児童一人ひとりの実態に合わせた教材教具を準備する。実態把握を的確に行えるように、発達段階の理解とアセスメントの仕方について研修の機会を設定する。 ・どんな情報でも、教師全員で確実に共有することが必要である。学部会や放課後の打ち合わせ以外にも他クラスの児童について知る機会やきっかけを持つ。
	身近な大人や友だちとの関わりを広げ、適切なコミュニケーション力を育てる。	1・3・7	・児童に呼び掛けるときは視線を合わせ、児童に伝わるように話し掛けるなど、児童一人ひとりに敬意をもって丁寧に関わる。 ・自立活動の視点から、児童一人ひとりのコミュニケーションの課題に応じて指導する内容や支援方法を明確にし、児童に関わる全ての教師と協力・連携しながら指導に努める。	・児童の動きや発する言葉から思いを汲み取ったりするなど、児童一人ひとりの実態に合わせ丁寧にかかわるように努力した。発語のない児童もカードや具体物を持ってきて要求できる場面が増えた。学部の教師以外にも、生活支援員や看護師などに学部に入っていただく機会が多く、大人とのかかわりが広がり、さまざまな人からのかかわりを受け入れられるようになった。学部外の職員に指導内容や指導方法について丁寧な説明が必要だったと感じた。	3.2	B	・教師全員が共通認識を持って児童に関わり、教師がよい手本となるようなコミュニケーションをとることが必要である。 ・個々に応じた支援方法を教師間で常に共有し児童に関わっていく。 ・他クラスへ応援に入るときや学部外の教師に応援依頼をする上で、共通理解、情報共有などの連携が重要になってくるので、密に連携を取るようにする。
中学部	生徒がそれぞれの良さを認め合い、主体的・協働的に活動できるよう指導・支援を行う。	1・3・7	・主体性を引き出すため「もっとやりたい」「もっと知りたい」と思わせる教材の工夫、授業のしかけを行う。 ・話し合う、認め合う、思いやる実践の場として様々な場面でグループ活動を設定する。	・学年、クラスを越えて課題別のグループで自立活動の授業（チャレンジタイム）を行った。遊びを中心に様々な遊具を準備して一緒に活動するグループ、ダンスをしながら様々な身体の動きの習得を目指すグループ、すごろくをしながら止まったマスの課題にみんなで取り組むグループなど、それぞれの課題にアプローチするための手法や教材を工夫することで、生徒のやる気を引き出すことができた。 　また、教師が生徒の気持ちを代弁したり、交代を促す声掛けをしたりする中で、生徒同士でも気持ちのやり取りが多く見られるようになった。 　年度が変わるとグループも変わるため、来年度は新たな取り組み方が必要になってくると考える。	3.2	B	基本的には本年度の取り組みを継続していくが、在籍生徒の3分の1が入れ替わり、クラスやグループのメンバーが大きく変わるため新しい取り組み方を展開していく必要がある。また、授業づくりや個別の指導力などの専門性を向上させるための研修などの取り組みを続けていきたい。 　さらに、本年度より連続性を意識した進路学習の取り組みを始めたので、次年度は磨きをかけ、中学部卒業後やさらにその先での生活につながる力やイメージが持てるような体験的な取り組みを進めていきたい。
	仲間や教師との活動を通して、相手を思いやる気持ちや関わる喜びを得られるよう指導・支援を行う。	1・3・7	・教師が率先して生徒と関わり、生徒同士をつなぐ役割をすることで、生徒同士の活動を促す。 ・話し合う、認め合う、思いやる実践の場として様々な場面でグループ活動を設定する。		3.2	B	
高等部	グループ学習をとおして主体的・対話的に学びを 深められる授業の工夫と、一人ひとりのねらいを意識した授業の工夫、実践を行う。	1・3・7	・自立活動のグループ学習を中心に、生徒の中心課題を共通理解した上で、活動内容や指導方法を検討し実施する。 ・他グループや他学年との情報交換を行い、共同学習や実践の工夫に生かす。	・「あそびの広場」という活動の柱に沿って、4つのグループに分かれて自立活動の指導に取り組んだ。テーマ研修の機会等を利用して、生徒の実態について話し合ったり共通理解したりして、自立活動の目標を意識した指導をすることができた。 ・生徒の主体的な活動を意識して指導することで、生徒同士の対話を中心に活動を進められたり、活発に意見交換できたりするようになる等、指導の工夫によって生徒の変化が見られた。 ・教師の指導体制の違いによっては、十分な指導ができなかったり、活動時間が足りなかったりしたグループもあった。	3.3	B	・今年度新たに始めた自立活動の指導の形は、教師の経験や知識による差が出ないことや、生徒が見通しを持って主体的に取り組めること等を考えると、しばらく続けていきたい形である。しかし、指導体制に差があり一部の教師に負担がかかっていたため、生徒や教師の配置を十分考慮して決定するようにしたい。 ・また、学部全体で集まって振り返りや反省を行う機会を設け、キャリア発達の促進にも努めたい。
	体験活動の中で得意なことを生かしたり役割を果 たしたりすることで自己肯定感を高め、自立して自分らしく生きる力を育てる。	1・3	・一人ひとりの得意なことを生かした役割分担等の工夫をし、それぞれの自立を目指した指導・支援を行う。 ・活動内容の検討や実施方法等を生徒主体で検討・実施させる工夫や実践を行う。	・Ⅲ・Ⅳ類型の生徒は、就業体験活動「わとくカフェ」に年間通して取り組んだ。それぞれが役割をもって繰り返し取り組むことで、自信をもって積極的に活動したり、生徒同士で声を掛け合って取り組んだりできるようになった。また、活動後の振り返りを工夫することで、自信や自己肯定感を高める機会をつくることができた。 ・Ⅰ類型の生徒は、「キャリア甲子園（プレ実施）」で自分についてのプレゼンに挑戦し、大勢に認められる経験をとおして、新しいことに挑戦する意義を感じたり自信をつけたりすることができた。	3.4	B	・就業体験活動「わとくカフェ」は、障害の種別や程度に関係なく、全員で役割分担して取り組めているため、来年度も引き続き取り組んでいく。活動の回数や場所等、他の教育活動とのバランスを考えながら、ねらいを明確にして取り組んでいきたい。また、年度によって生徒の実態が変化しても継続していけるような形や、より生徒主体で取り組んでいく場面を増やす工夫についても検討していきたい。
総務部	各分掌と連携し学校運営の企画・調整を行い、重点課題達成の下支えをする。	4・5・6	・情報担当を中心に、ICTを活用した業務改善を図るため、ICT環境を整備するとともに、クラウド活用や情報セキュリティに関する研修を実施する。	・ICT機器の保管場所の整理やICT機器の台帳の作成、アカウントの周知と管理を行うことで、ICT機器を安全に使用できる環境を整えることができた。またGaroon、Teams、Google カレンダー等の使い方について研修を実施し、ICTによる業務改善を進めることができた。Teams等のクラウドの活用を浸透させるには、継続的に周知と研修を行っていく必要があると感じた。	3.4	B	・次年度以降も、ICT機器の種類と数の増加が見込まれるので、ICT機器を適切に管理できるように環境を整える。また新規のICT機器の使い方等を研修を通じて、職員全体の理解を深めていく。 ・Teams等の活用を推進し、業務改善を図る。 ・スクールバス位置情報の配信及び欠席・遅刻連絡に関するシステムの利用を定着させる。
	災害から自らの生命を守るため主体的に行動する実践的な防災教育の推進。	6	防災学習の再構築及び防災マニュアルの改訂と防災教育全体計画の立案をする。	・防災体験プラグラムに企業を誘致することで、教職員の負担を減らしながら、多様なプログラムを提供できたことで、参加者の満足度を高めることができた。また防災マニュアルや火災時の対応について見直すことで、現状の教職員の配置で対応できるものになった。	3.4	B	・企業や行政に協力してもらった防災体験プログラムは、学校内外から高い評価も受ける一方で、協力団体への配慮が足りていなかった点もあった。次年度は、協力団体のブースは体育館に集める、周辺地域との関りを強化し、コミスクとしての機能を持たせるように企画していく。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価 平均	判定	課題と改善点（来年度に向けて）
教務部	個別の指導計画（新様式）の記入方法について情報共有し、適切な実態把握を基にした目標設定ができるように促す。	1・3・6	・年度初めに職員研修を実施する。 ・学習指導要領解説（各教科の目標・内容の一覧）や課題関連図の活用を促す。	年度初めに職員研修を実施し、課題関連図を活用して実態把握することや学習指導要領解説（各教科の内容・目標）を参考にしながら個々の目標設定を行うこと等について、確認することができた。研修した内容がまだ浸透していないところもあるため、継続して研修等で伝えていく必要性を感じる。	3.2	B	・次年度についても年度初めに個別の指導計画の目標設定や評価、課題関連図の活用について、職員研修を行うとともに、今年度質問が多かった内容については、マニュアルを作成する等、工夫する。 ・新しい情報や手順の改定等があれば、伝達研修等を通して随時共有するようにする。
	道徳科における評価の考え方についての共通理解を図る。	1・6	・道徳教育推進委員会を中心に職員研修を実施する。 ・他学部の実践を知る機会を設ける。	特別支援学校における道徳科の評価について、外部講師を招いての職員研修を実施することができた。評価の書き方についてはより具体的な記入方法について共有し、イメージしやすくした。他学部の実践を知る機会については、今年度は設けることができなかった。	3.2	B	・道徳科の目標設定や評価方法についての情報をまとめ、整理した上で、今後も継続して情報提供を行っていく。
生活安全部	児童生徒の主体的、対話的な活動をとおして自主性や社会性を育み、自治的集団を育成する。	1	・児童生徒会活動等において、児童生徒が主体的、対話的に取り組めるように活動内容や指導体制を工夫する。 ・活動内容の発案や検討を、生徒主体で行えるように指導や支援を行う。	・全校集会において、ダンスやクイズを取り入れるなどの活動内容の見直しを行った。ダンスでは、小学部の児童から高等部の生徒まで楽しく踊ったり歌ったりする様子を見ることができた。また、全校集会の実施時間を約30分に短縮し、小学部の児童が参加しやすいように工夫した。 ・全校集会で行うダンスやクイズ等の内容を執行部で話し合って決めたり、本部役員会で月目標や図書コーナーの活用方法等の意見を出し合ったりするなど、生徒主体で取り組むことができた。	3.3	B	・各委員会の活動や全校集会の内容について、より児童生徒が主体的に活動できるように内容の精選や工夫が必要。 ・本校の生徒会と近隣の特別支援学校の生徒会との意見交流するなど、他校の生徒会の活動状況を知る機会を設けたい。
	児童生徒が健康を保持して、安全に活動できる環境を整備する。	6・7	・継続して家庭や舎と連携し、日々の健康観察を細やかに行う。 ・医療的ケアの必要な児童生徒を含め、様々な実態の児童生徒にとって危険がないか、意見交換や検討を行う場を設定する。	・健康観察表や連絡帳をもとに、家庭や舎と連携して細やかな健康観察を継続して行った。 ・ヒヤリハット事案の共有、ケーススタディの実施、緊急時の連絡体制の確認などを行い、児童生徒の安全について考えたり、情報共有したりする場を設定することができた。 ・今年度より、医療的ケアの児童生徒が安全に学習できるよう教室を新設した。必要な物品や教室備品の購入、空調設備の調整等、各部署と連携して環境を整備することができた。緊急時や災害時を想定した環境整備については、引き続き計画的に整備する必要がある。	3.1	B	・来年度から健康観察表はなくす予定だが、登校後検温して健康観察を行い、引き続き家庭や舎と連携して細やかな健康観察を行う。また、手洗い、換気、症状がある場合のマスク着用等の基本的な感染症対策も改めて促していく必要がある。 ・緊急時の連絡体制や共通理解事項を確認したが、まだ周知が不十分なところがある。掲示するなど、緊急時の連絡体制や共通理解事項についてより分かりやすくすることが課題。 ・医療的ケアの児童生徒の緊急時・災害時を想定した環境整備や体制の工夫が今後の課題。
進路指導部	進路に関する学習を実施していく中で、生徒自身が進路について主体的に考え、自己理解を深められるようにする。	1	進路に関する学習において、自己評価および外部（事業所等）からの評価から、就労準備性ピラミッド等をもとに自身の達成できていること、必要な力の把握を促す。	就労準備性ピラミッドを意識して評価を分析することで、個別の課題を把握することができた。学校の様子からの見立てと、事業所からの見立てに違いがあることから、学校内での指導の指標にもなった。特に、コミュニケーション面が大切で、自分自身を把握して、どんな支援依頼が必要かや何に困っていて、どう解決することができるかなどの指導の必要性を感じる。	3.2	B	現場実習や中小企業家同友会お仕事体験会、テレワーク体験会など、体験的に職業について学ぶ機会を設けることができた。児童生徒にとって有効な取り組みであることから次年度も体験的に学べる機会を設けたい。その中で、児童生徒の自己理解を高める必要性を感じる。自分にできることや得意なことを活かし、困ったときなどの自分の対処方法など、より深い自己理解を目指し、主体的に進路について考えられるようにしたい。そのために、現場実習等の事前事後学習において、各学年と連携し、深めていくべき内容を検討し学習内容を充実させたい。
	生徒自身が、今現在の学習が卒業後の生活にどのように繋がるのか、また自分自身の進路について幅広く考えられる機会を設ける。	2	これまで同様に校外学習ならびに実習を実施することに加えて、外部機関による職業体験会を実施し様々な業種や他者と関われる時間を増やし、日頃の学習活動を活かせる場面設定に取り組む。	今年度は中小企業家同友会の協力を得て仕事体験フェアを実施することができた。実習とはまた違う雰囲気の中で様々な職種を体験させていただき、また仕事をなぜするのか、お客様への意識など、学校との違いを生徒に伝えていただけた。また、在宅ワークでの障がい者就労を支援されている株式会社スタッフサービスクラウドワークとの連携で、テレワーク体験にも取り組めた。就労の可能性を広く知る機会となった。	3.3	B	今年度行った仕事体験フェアは、児童生徒が働くことを知る場として、また外部の関係機関の方々に本校の児童生徒を知っていただくための啓発の場として有効だった。次年度も実施を目指したいが、今年度は設定した時期と場所が反省が必要となった。残暑厳しく、また来校者数も多い中、空調設備のない体育館だったことでの体調面でのリスクを改善する必要がある。 在宅ワークに係る取り組みについても次年度実施していく予定。改善点として、対象生徒を拡大し、より多くの児童生徒に体験できるようにしていきたい。
	高等部卒業後のイメージを明確に持ち、キャリア発達を促せるよう、実際の場面を見学・体験できるようにする。	3 7	継続して、進路希望調査を活用し、その内容に応じて保護者や本人に情報を提供したり、聞き取りを行ったりしながらトライやるディズや現場実習などを企画、実施する。また外部機関とも連携を図り、家庭への情報発信を充実させ、個別進路相談を充実させ、本人保護者自ら見学体験ができるように整備する。そして希望する進路（労働・福祉）に応じた家庭と関係機関、学校との繋がりを構築して進路相談会、移行支援会議を通じて役割分担を行う。	情報提供を公平に行えるように、事業所検索やサービス解説に活かせるツールの紹介や学習を対面だけでなく、オンラインも活用したり、それを録画して学校ホームページへの掲載をしたりして、保護者の皆さんにいつでも情報を収集できるようにした。また、積極的に個別相談を受けて、進路に関する相談を行った。卒業後は家庭自ら動いていただくことが必要となるため、在学中からその形態を行うことが必要で次年度も同じように周知し、家庭との連携を図りたい。外部関係機関との連携も同様で、役割分担をし、包括的に支えられるように取り組みたい。	3.3	B	次年度においても進路希望調査を行い、その中身に応じた進路指導を展開していきたい。また、情報提供において、各家庭が情報を公平に得られるように今年度同様に対面とオンライン、また学校YouTubeを活用していく。次年度の課題として、個別相談についてを丁寧に周知し、各家庭が進路決定に自分事として捉え、卒業後の社会生活を意識できるように啓発していきたい。 関係機関との連携については相談支援事業所の相談員との連携を見直す必要がある。福祉就労及び福祉サービス利用の見通しを持っていただけるよう、進路希望調査の共有や現場実習先への引率同行依頼などをし、進路の方向性の共有を図りたい。
支援研修部	校内外の人的資源を有効活用し、個々の実態や特性に応じた指導を充実させて、一貫した支援を行う（校内支援）	2	・「自立活動」や日常の活動への支援について、学部や養護教諭、寄宿舎指導員及び外部人材と情報を共有し、担当者へ指導技法の習得・指導技術の向上のための助言を行いながら協働して児童生徒の支援にあたる。	・児童生徒の心身の成長・変化・健康面について養護教諭と情報共有し、指導を行った。あまりハ「巡回相談・指導」では、事前に各児童生徒担任と寄宿舎志度員に対して質問内容の集約を行い効率よく指導を受けるようにし、児童生徒への指導技術・介助技術の習得・向上が図れた。実技指導（ボバースコンセプトに基づくアプローチ・動作法等）を実施し、指導技術・介助法の習得・向上につなげることができた。	3.2	B	肢体不自由児童生徒への指導技術・介助技術の定着と一層の向上を図ることが課題である。実態把握技術の向上・動作訓練の基本的な考え方や基本技法の習得について、あまりハ指導を有効に活用したり実技研修を実施したりする予定である。また、寄宿舎児童生徒の実態把握や介助方法の共通理解のために、担任と寄宿舎指導員が情報を共有したり意見交換したりする場を設ける予定である。
	市町教育委員会と連携協働しながら縦横連携を推し進め、地域の学校園や関係機関から寄せられる相談に対応できるように相談・支援体制を充実させる（地域支援）	7	・市町教育委員会とインクルーシブ教育の推進について方向性を共有しつつ、縦横連携を推し進める。 ・校内の専門性を有する人材を活用した巡回相談と来校教育相談、わとく地域支援センターだよりの発行をすすめ、学校全体がチームとなってセンター的機能を担う。	・発達障害の児童生徒への支援体制や通常学級担任の専門性向上のために必要な取り組みについて市教委と協議を重ね、研修会の企画や教育相談を実施することができた。 ・長期休業中にこども園と中学校への教育相談や就労機関の研修会の場で本校職員同行の地域支援ができた。一般的な地域支援についての情報は総務のなごみ通信で発信、より専門的な情報を地域支援センターだよりで発信することができた。	3.2	B	・インクルーシブ教育を推し進めるための縦横連携について市教委と検討を重ねることが課題である。次年度は特別支援学校のコーディネーターとエリアコーディネーターがつながるための仕組みづくりを市教委と具体的に検討していく予定である。 ・引き続きOJTによる人材育成に努めることが課題である。地域支援に同行したり、研修会の講師を務めめたり、地域支援センターだよりの原稿を執筆したりするなどして自己研鑽の場につなげる予定である。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価 平均	判定	課題と改善点（来年度に向けて）
	児童生徒の実態把握および中心課題を見極め、中心課題に応じた指導を実践する力を向上させる。（研修）	6	・児童生徒の中心課題を定め、自立活動の授業の進め方を検討する。中心課題に応じた自立活動の授業実践および検討を行う。	・各学部ごとに分かれて、児童生徒の中心課題に応じた自立活動の授業について研究することができた。また、研究授業と事後研修を行うことで広く意見を取り入れることができ、授業づくりの参考となる意見交換ができた。そこで得られたヒントをもとにして、児童生徒の強みに着目した授業づくりを展開することができた。	3.2	B	・児童生徒の実態が幅広くなっており、教員に求められる専門性が多様化している。教職員が求める専門性についても個人差があるため、ニーズに合ったテーマの設定や枠組みを作ることが課題である。大きなテーマは定めつつ、研究したい内容ごとにグループを編成して研究に取り組む予定である。また、計画的に研修を実施するために兵庫県教員資質向上指標の有効活用を提案する予定である。
舎務部	卒業後の生活を見通し、社会性、身辺自立、生活力等の向上を目指して支援を行う。	3 5	学部担任、保護者、担当グループや全体での情報共有を密に行う。また障害特性、課題、生育環境などの把握を丁寧に行い、支援方法の検討、見直しを適宜行う。	舎生の思いや実態など、様々な情報を担任から得られたことで、指導・支援方針の見直しにつなげることができた。しかし、きめ細かい情報の共有や保護者との連携には課題が残った。一方、自立に向けて自ら課題を設定し、取り組んだり努力したりする舎生も現れている。	3.1	B	課題 ・保護者、担任とのよりきめ細かな情報、指導方針の共有と学校内における寄宿舎理解 ・学舎連絡会のより有効な活用 対策 ・学舎連絡会が情報交換の場にとどまらず、指導方針の共有など踏み込んだ内容になるよう、持ち方や書式を改善する。 ・舎生の様子フォルダーを見える化するともに、確実な記入を促す。 ・男女混合で舎生を担当し、それぞれの視点から実態把握や目標設定などを検討する。 ・グループ会を定期的に行うと共に報告会を持ち、一人ひとりの実態と指導方針を全体で共有する。
	寄宿舎指導員としての実践力と専門性の向上を図る。	6	支援研修係を中心に全体で舎生それぞれの課題設定や支援方法を検討し実践する。また様々な機会を設け、研修を行う。	卒業後の生活を見通して必要な力を育てたいという思いと、本人の実態、担任の思いとの調整不足があった。子どものできるところ、持てる力等、強みを伸ばす視点での支援や、失敗から学ぶ事があるという視点での支援など、子ども目線の目標設定に切り替えた。	3.0	B	課題 ・子どもの実態に即し、強みを伸ばす視点での実践力の更なる向上 ・複雑で多岐にわたる寄宿舎業務の新転任研修の見直し 対策 ・保護者、本人の願いや実態をもとに、生活目標や様々な文書の作成を行うなかで、子ども理解や捉え方などを考えるとともに、引継ぎやグループ会など様々な機会を利用して指導・支援方法を検討していく。また起案し、管理職の指導助言を得る。 ・新転任者研修の内容、進度を見直し、加重負担にならないよう配慮する。 ・男女混合で舎生を担当し、それぞれの視点から実態把握や目標設定などを検討する。 ・グループ会を定期的に行うと共に報告会を持ち、一人ひとりの実態と指導方針を全体で共有する。
事務部	事務室職員が教員との連携を図り、学校運営に参画することにより、組織的な学校運営が促進され、学校の総合力を向上させることが期待できる。		①就学奨励費など児童生徒に関する事務処理において知り得た情報で、教員と共有すべき内容のものを迅速に提供する。 ②給与(手当)・休暇制度の改定、また福利厚生事業の実施など、その都度、職員へタイムリーに連絡していく。	①②ともに概ね達成できている。 児童生徒に関する情報で教育活動に関するものは共有し、また、給与改定、休暇制度改正、福利厚生事業の実施など職員に関わる情報については、県教委等から通達後タイムリーに提供できている。 １歩踏み込んだ連携を進める取組みとして、Garoonの運用により効率的な情報交換ができつつある。	3.3	B	・学校徴収金振替口座のWeb登録や就学奨励費申請のオンライン化など、保護者自身による情報機器操作が増え、これまで以上に寄り添う対応が必要となり、個々の実情の把握による事務・教員間の連携を深めなければならない。 ・服務システムのみならず、給与関連申請システム・旅費システムが導入されることとなった。事務室サイドからの情報提供だけでなく、職員自身の適切な時期の適正な申請・操作を求めることになり、より一層のコミュニケーションが必要となる。
	児童生徒、教職員が安心安全に学校生活を過ごせるよう環境整備に努める。		施設・設備の老朽化への対応、防災、感染症への対応、不審者侵入への対応などの環境整備(必要物品の購入を含む。)に努める。	建物、設備、備品等の経年劣化が進み、大規模修理、更新等の時期が到来しているものがあり、また、児童生徒の障害種に対応した環境整備として以下の対応を行った。 (1)R5.1～3月実績 食堂シャワーシンク取替工事、校長室内外部改修工事、北校舎3階及び体育館トイレ非接触化工事 グラウンド等樹木伐採、グラウンド真砂土入れ替え、保健室・寄宿舎職員室・厨房事務室プリンター更新 (2)R5.4～R6.1月実績 うごきの部屋床板張替え工事、すまいるルームエアコン取替工事、非常用放送設備改修工事 厨房立体ガス炊飯器更新、寄宿舎業務用洗濯機更新、すまいるルーム備品等新規購入 寄宿舎棟防犯カメラ設置工事、パソコン教室カラープリンター更新、給湯ボイラー修理 【部活動応援プロジェクト】 図書コーナー設備・本の充実、ユニカール購入、ボッチャ軽量ランプ購入 (3)今後予定 スクールバス和田山コース中型バスへ更新、視力検査器の更新 今後も施設設備・教育環境・社会環境・予算の状況等に十分留意し、適切に更新整備を進めていきたいと考えている。	3.2	B	・施設の整備には多額の経費を必要とする場合が多く、昨今の県財政の厳しい状況の中、限られた予算で適切に整備を進めることが非常に困難な状況となっているなかで、安全安心な学校環境の実現に向けて、全職員がその意識を持ち、施設設備の状況について留意し、危険箇所の改善提案等を行うことが重要である。また事務室担当者は予算確保について県財政当局への要望を的確に行っていく必要がある。

意見：いろいろな事でのICT化を始め、年々職員の業務の効率化、生徒の成長が良い方向に見えてきている。今やっていることを更にブラッシュアップしていき、今まで変えてこなかった古いやり方を刷新していくことで、現代にあった教育が出来ると考えます。